

モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332801>

出版情報 : 文學研究. 65, pp.199-220, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』

永田英一

一九〇六年、モーリス・バレスはアカデミー・フランセーズへ入り、同時にパリから選出されて十三年ぶりに政界に復帰した。バレスは一八八九年ブーランジェ將軍支持者として二十七歳でナンシー選出の下院議員となり一八九三年落選して議席を失ったのであったが、翌年ドレフェス事件が勃発すると「祖国フランス同盟」を組織して反ドレフェス派の闘將として活躍した。そして、いま再び国会に席をえて、その「戦闘の雰囲気」に愛国の熱情をかき立てられた。また文学、思想の方面では、すでに『自我崇拜』のエゴティスムから『国民的エネルギー』のナシヨナリズムへ進展して独自の民族主義、伝統主義を唱導し、今や『東方の砦』によってアルザス・ロレーヌ問題に取組み、特に若い世代の上に「一種の精神的父、魅力的な長兄」として大きな影響力をもっている。……そして政教分離問題におけるあの熱烈な教会擁護、ひいては第一次世界大戦の戦前戦中を通じての、国民運動におけるバレスの指導的役割については周知の通りである。

1) Maurice Barrès (1862—1923) バレスには *Culte du Moi, Roman de l'énergie nationale, Bastions de l'Est* などと呼ばれる一連の問題小説がある。

2) Émile Henriot, *Maîtres d'hier et Contemporains*, 1955, p. 213.

3) *Ibidem*, p. 179.

さて、一九二二年はジャン・ジャック・ルソー¹⁾の生誕二百周年にあたる。この年、ルソーの二つの祖国、フランスとジュネーヴでは、一八七八年の歿後百年祭のように、また近くは一九六二年の生誕二百五十年祭のように、諸種の記念事業が行われたのであったが、フランス下院では、同年六月十一日、時の急進派政府によって提出された「ルソーの榮譽を讃えるため」の予算案が上程された。——表題の小冊子、モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』²⁾は、その予算案の議決に対する反対意見の陳述である。われわれは、まづ、その内容を紹介しよう。

1) Jean-Jacques Rousseau (1712—1778)

2) Maurice Barès, *le Bi-centenaire de Jean-Jacques Rousseau*, Paris, 1912.

*

諸君、

私は、政府がジャン・ジャック・ルソーの榮譽を讃えるために、われわれに要求する予算案には投票いたしません。そしてこのことについて簡単に積明いたしたいと思います。私は『孤独な散歩者の夢想』、『告白録』や『新エロイーズ』の、情熱と感受性にみちた芸術家——いや音楽家と申しましょう——を賞讃することにおいては決して人後に落ちません。あの人間そのもの、あの自然と孤独への抒情的な愛に結びついた、あの貧しくて気むずかしい徳義、私はそれを批難しようとはいたしません。そして社会的観点からすれば、かれが極度

に知性化した社会において、想像と感情の豊かな溢出をもたらした時、かれはかれなりに有用の、さらには善行の瞬間をもつたことに異議を唱えるものではありません。私は私の記憶にとどめている、ある若い亡命者の、あの言葉の真実さを痛切に感じます。その亡命者というのは、革命によって処刑されたキュスティーン將軍の子息で、ダルムシュタットに亡命中、ある夜、——多くの人々が腐敗した一社会の映像を見ようとした——あの『危険な関係』という恐るべき冊子を読んで、こう叫んだのでした。「ああ、私はルソーの気持がわかる、手の込んだ悪徳に対するかれの崇高な憎しみがわかる！ 十八世紀のある種のサロンの真の叙事詩ともいふべきラクロの一書を読んだあとでは、ルソーの自然愛のもつ行過ぎた点もゆるされる。それは清新な空気を呼吸させるのだ。」

諸君、以上が私の賞讃する部分であります。しかし、諸君は私にそれ以上のことを要求している。諸君は私に『不平等論』や『社会契約論』や『エミール』の著者の社会的、政治的、また教育的原理に加担することを欲しているのだ。私はそうすることが出来ません。そしてつけ加えて申すならば、諸君のうちの大部分の人もそうすることが出来ないでしょう。ルソーの榮譽を讃えよと諸君に向けられた要請の中には、深い真実が欠けているのであります。

今日この時において、諸君は、社会を自然の枠外に置き、そして自然の名において個人を社会に対して反抗させるといふ憎むべき逆説を創始した男を、国家の名において、正式に賞揚することが有益かつ実り多いことと真に考えているのでしょうか。今や諸君は、社会に対して叛乱を起し、社会は不正かつ邪悪であり、自分らはそれに死の戦いを宣するという人々を犬畜生のごとく打仆しているが、無政府主義のあらゆる理論家が当然

のごとく抛りどころとする人の榮譽を讃えるべきなのは、こうした時期にはありません。クロボトキン²⁾はジャン・グラヴ³⁾とルソーとの間には何ら選ぶところがない。そしてジャン・グラヴも、クロボトキンも、理論的にはガルニエ⁴⁾やボノ⁵⁾を否認することは出来ないであります。

諸君は、もっとも組織的に児童から家庭と民族の影響力を疎外した教育家を、国家の名において、正式に賞揚することが有益かつ実り多いことと真に考えているのでしょうか。私はといえば、私は教育者の義務、それは形成される人格の上に、もっとも早期に文明の刻印を押し、そしていまだ新鮮な精神の中に、その家庭と国民によって最善のものとして確認されたあらゆる思想、あらゆる感情を植えつけることだと考えるのであります。

諸君は、社会秩序はまったく人為的なもので、さまざまな因習に基づいており、家庭そのものも因習によらねば維持されぬということを原理として打立て、そしてそこからわれわれ各自は勝手気ままに社会を建直す権利があると推論する男を、国家の名において、正式に賞揚することが有益かつ実り多いことと真に考えているのでしょうか。ああ！ 諸君、われわれはすべて、社会は純粹理性の作品ではなく、その根源にあるのは契約ではなくて、もっと異った、神秘的な影響力であることをよく承知しております。そしてその影響力は、一切の個人的理性とは別に、家庭、社会、人類における一切の秩序を打立て、かつこれを維持しつづけるのであります。

今や、フランス青年層のあらゆる党派において、無政府主義のあらゆる形態を阻止するために力強い努力がなされており、すでにその成果が見られるのでありますが、われわれがあらゆる無政府主義の偉大な使徒、元祖

の榮譽を讃えることの許されるのは、こうした時期においてはありません。ルソーにあっては、そのあらゆる政治的著作においては、生あるものをプロクルステスの寝台に寝かせるという同じ幻想しかありません。かれの専断的理性は、時間の神秘的な深さの中にその根元をもつ社会よりも、より健全な、より力強い社会を創設するために、そうした理性だけで足りると考えるのであります。何という傲慢な自信でしょう！ それというのも、ルソーは学問の方法を知らないからであります。ルソーは観察しない。想像する。かれの純粹に觀念的な構築物に対して、われわれは觀察の精神の、いやあえて言うならば、歴史による実験の精神の成果を対向させる。検討、調査、分析、これが久しく伝統に対決して来しました。しかし諸大家が出現して、検討し、調査し、分析したところ、結局、伝統の有益な力を發見するに到ったのであります。これら大家のうちの一人——諸君はこの人を否認することは出来ない、というのは諸君はこの人のためにソルボンヌの正面に彫像を建てたからであります——そのオーギュスト・コントはこの莫大な仕事を一言でもって要約しました。「生者は死者によって支配される」と。死者はわれわれの師であります。われわれは死者の意志を現在の必要に適應させることは出来るが、これを否定することは出来ないし、またすべきではありません。ルソーは、とりわけ、あの忌わしい、しかも徒らな叛逆の中にわれわれを投込もうとする魔神であつて、あたかもわれわれが一切を新規にやり直さねばならぬかのように、またいまだ會てわれわれが文明化されたことがなかつたかのように、行動することをわれわれに勧告するのであります。われわれはかれに追従することを拒否します。

諸君、私は、政府当局の人々としても、ルソーの諸原理を頌讚することは深い眞実性のない示威運動であると言明して憚らないのであります。諸君が、その意味をあまり検討もしないで、これから演じようというの

は、一つの機械的なジェスチュアか、素人楽団の古い一曲なのでしょうか。あるいは、さらに悪いことには、諸君は、私の唱える異議をすでに自分自身に対してなしながら、しかも革命の聖者の仲間入りをしている者に對して、こうした尊敬をあえて拒否しようとするのか。何はとまれ、私は、諸君の法案には、一九二二年のフランスにふさわしいものを何も見出しません。私はこの議決には投票しません。私は、ルソーがわれわれの社会の傾聴すべき予言者であるとは宣言しないでしよう。かれは偉大な芸術家であるが、しかし党派心のみが否定しうる奇行と過失によって制約されております。他の人々は『エミール』や『不平等論』や『社会契約論』を自分のバイブルとするがよろしい。私としては、かれの大交響樂の中で、あたかも魔法使のようにかれに耳を傾けはするが、しかしこの途轍もない「音楽家」に人生訓を求めようとはいたしません。

- 1) Le général Custine (comte de, 1740—1793) アメリカ独立戦争で武勲を立て、三部会にも選出され革命軍で活躍したが、結局通敵の罪科により処刑された。息子フィリップ (Philippe de Custine, 1769—1794) も軍人で父の副官を勤めたが、これもまた死刑の宣言をうけた。
- 2) Kropotkine (1842—1921) ロシアの有名な無政府主義者。
- 3) Jean Grave (1854—1939) 政治記者、無政府主義者。La Revolté, といふ Les Temps nouveaux を発刊。La Société mourante et l'anarchie (1898) などの著書がある。
- 4) Garnier 次註参照。
- 5) Bonnot (Joseph, 1876—1912) 無政府主義者の徒党を指揮して暴動を起し、諸所の銀行を襲撃したが、逮捕の際に殺された。ガルニエもこの暴動で殺された。
- 6) Procuste ou Procrustes (Prokrustes) アッティカの盗賊。旅人を剝いで、鉄の寝台に寝かせ、もしその足が寝台より長ければ切断し、短かければ打伸ばした。(ギリシヤ神話)

テーヌやルメートルや、またヌーリツソンの名をあげるまでもなく、ルソー否定あるいは嫌忌のフランス人の論は多い。特にバレスの場合、当時の社会的背景は別として、その民族主義、伝統主義、また国民感情からしても、これは当然のことであり、その論旨はきわめて明快である。けれども、他方、ルソー肯定あるいは讚美の論もまたあとを断たない。作家思想家においてこれを求めるならば、まづ筆頭に『ジャン・クリストフ』の作者をあげることが出来る。――

モーリス・バレスの対極として、われわれは試みにロマン・ローランのルソー観を一瞥しよう。ローランはその編著『ジャン・ジャック・ルソー読本』^{*}の序文において、ローランならではの深い共感と透徹した理解を示し熱い崇敬を捧げている。

* *Les pages immortelles de Jean-Jacques Rousseau, choisies et expliquées par Romain Rolland, Paris, (Ed. Corrèa)*

「旧世界の怨恨」は、十九世紀のあらゆる動乱顛覆の責任を、ヴォルテールとともに、ルソーに負わせた。けれども両者のうち、はるかに重要な役割をもつのはルソーである。

「ヴォルテールは数多の星々の密集した星座、あの『百科全書派』のもっとも輝く星であった。ルソーはひとりで生き、ひとりで闘った。さらには、この闘争において、かれは百科全書派の憎悪にぶつかつた

モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』(永田)

*

が、道徳的にかれらを反駁し、社会的にかれらを凌駕した。ヴォルテールとその偉大な副官たち、デイドロ、ダランベール、ドルバック、エルヴェシウスは、特に旧社会とその偏見悪弊の打破に狂奔する新精神の否定面を具現した。かれらは批判的、冷笑的な自由理性の戦士であった。ルソーは、自分ひとりで、新しい信仰の建設面を、その肯定を代表する。かれは共和国の告知者であり、フランス革命の拠りどころである。……運命がかれに振りあてた役割に対するかれの抗議にもかかわらず、孤独者ルソーは、歴史上、革命動乱の偉大な先駆者、新時代の先達として留まるであろう。」

ルソーは一七二二年六月二十八日、あの驚くべきジュネーヴの「都市共和国」に生れた。ここは福音書的改革宗教の本拠であり、これを包囲し、浸透する君主制的カトリック諸大国の間にあつて、その存在そのものが「一つのパラドクス」であつた。

「ジャン・ジャックは、かれの出身を誇りとし、全生涯を通じて、深くその刻印を担っている。かれは「ジュネーヴ市民」「ジャン・ジャック・ルソー」と署名し、「自由国家の市民、主権者の一員」たるの資格を主張する。かれは『不平等起源論』を「ジュネーヴ共和国」に献じ、「祖国」の擁護に目を光らせる。あらゆる政治形態の批判において、かれは唯一の政体を確証し、これを模範として提示する。」それがジュネーヴの政体なのだ。」

ルソーは少年時にたまたまカトリック教に改宗したことがあつたが、公然と新教を奉じる。一七五四年、正式に改革宗教に復帰すると、かれはあえて「私はパリでプロテスタンの信仰告白者だ」と宣言する。そして栄

光の最盛期には、宮廷の貴族たちや神の敵なる哲学者たちの中で「寛容な心のキリスト教」を説き、ついに自分は「フランスで神を信じる唯一の人間だ」と叫ぶにいたる。

「共和国と神、——この二重の愛、この二重の信仰、かれはこれをジュネーヴの乳房で吸ったのだ。そしてそれがかれの血をつくった乳汁なのだ。パリで、かれが同時代のすべてのフランスの作家たちからひとときわ傑出しているのは、そこからなのだ。」

ルソーは当時フランスに醸成されつつあった社会不安を感じるには例外的な条件にあった。かれはフランス的、パリの環境にも、また施緩しつつあった絶対君主制にも属していなかった。かれは異邦人なのだ。そしてこの異邦人は、一七四九年の開眼の瞬間から、「偉大な真理」に目ざめ、にわかには「文明の破壊者」として立現われ、人間知性のあらゆる獲得物のご破算を要求する。ルソーとしては、この過剰文化の感染から免れることによって、自分自身と同時に祖国ジュネーヴを救うことしか考えていなかったのだが、しかし「人間が事を計り、天才が事をなす」のである。

ルソーはもはや何ものも容赦しなかった。かれは昨日の友、あの哲学者たちの「主義の中には誤謬と狂気」しか見えず、また「社会秩序の中には圧迫と悲惨」をしか見なかった。『不平等論』においては、完全に「叛逆の鬼」のとりことなり、仮借なき論理をもって所有権を剔抉し、さては未来の「民主的金権政治」をも告発する。

「ルソーは恐しく真剣だった。かれが金持に対して、また「除々におぞましい頭をもたげる専制主義」

に対して呪咀を投げ、叛乱もそれが専制者を扼殺したり、追放する時には「正当な行為」であると宣言するのを聞いて、人々は怖毛をふるうのだった。」

かくして一七八九年の革命的世代は、ジュネーヴの共和主義者に訴えた。ブリッソーは『不平等論』の理論を展開し、ロベスピエールはこの「革命の先駆者」を讃え、「人類の教師」として祭りあげた。相闘うあらゆる党派の首領たちも、ルソー崇拜においては一致していたのである。

精神界においても、ルソーはまた偉大な革命者であった。かれは近代の魂を解放し、近代精神文化のあらゆる分野において起点に立つ。特に教育、道徳思想におけるその影響力は決定的であった。

「近代教育学はすべてかれの『エミール』に鼓吹された。かれは自分に対してはあれほど弱かったが、堅固で明晰で柔軟な、すばらしい教導者であった。かれは健全な、生きた、真実のモラルへの本能をもっていた。そのモラルは決して原理や信条に従属したものではなくて、正しい欲求や弱さに適合した、深く人間的なモラルである。」

ジャン・ジャックの「最大の教師は自然」であった。同時に自然はかれの根本理念であり、自由、正義、平等、幸福などルソーに親しいあらゆる概念はすべてここから抽出される。

「両著（『社会契約論』と『エミール』）は緊密に結びついている。両著ともその原理を自然人の本質的自由の上に設定しており、教育はこの自由を保持すべく、——また立法者は現実にこれを確保すべきであろう。」

両者はいづれもルソーの筆から生れた、そして十八世紀の前期革命精神の着想した、もっとも大胆な、もっとも実り多い著書である。」(本文二一四頁)

*

以上は、なるべくバレスの論点に沿って、ローランの所説を摘記したのだが、これは明らかに極端な対照をなしている。そしてそれにはもちろん諸種の理由が考えられるであろうが、われわれは、そのもっとも根本的なものとして、ジャン・ジャックの祖国「ジュネーヴ共和国」をあげることが出来ると思う。というのは、ここでもまた、ガスパール・ヴァレットのあの確信にみちた断定を想起せざるに出来ないからだ。

「フランスの偉大な作家たちの間で、ルソーの第一の獨創性、そしてもっとも基本的なもの、それはフランス人ではなくて、ジュネーヴ人であるということだ。*

* Gaspard Vallette, *Jean-Jacques Rousseau Genevois*, Genève, 1911, *Introduction*, p. 1.

ジュネーヴは、もともと、十六世紀に宗教改革者ジャン・カルヴァンが建設した教会都市であって、ルソーの時代にも、人口わずか二万の小邑ながら新教のローマとして、そのピューリタンの信仰道徳、ストイックな風俗習慣を誇っていた。また政治的には自由国家、民主的共和国として、その古代的政治形態と行政機構を誇っていた。ジャン・ジャック・ルソーはこの「ジュネーヴ共和国」の子として、しかもその上位階層——選ばれた千三

百人の構成する「市民階級」の子として生れた。ルソーは少年時代にジュネーヴを去り、以来、この地に定住することはなかつたのであったが、終生「祖国ジュネーヴ」に愛着し、そしてロマン・ローランもいうように、その「刻印」を保持し、その「市民」たる資格を誇りとした。

わけでも、かれが幼時父イザーク・ルソーから注入された「愛国心」ほど熱烈で抜きがたいものはない。——兵士たちがサン・ジェルマン連隊から帰ってくると町にはお祭り騒ぎが起る。その渦の中で、昂奮した父はわが子を抱きしめていった。

「ジャン・ジャックよ、お前の国を愛せよ。この善良なジュネーヴ人たちが見えるか。かれらはみんな友達だ、みんな兄弟なのだ。喜びと和合がかれらの間にみちているぞ。お前はジュネーヴ人だ。お前はいつか他の国々の人を見るだろう、しかし、私ほど旅をしても、決してこれと同じ人々には会わないだろう。」

* *Lettre à d'Alembert, Garnier, p. 237.*

ルソーは三十一歳でパリへ出た。ここは大国フランスの首都、ヨーロッパ文明の中心、時はルイ王朝の爛熟期で、文華咲き誇る中にも人心の弛緩、風俗の頹廢、社会制度の欠陥は蔽うべくもなかつた。青年ルソーはここで人並に成功を夢み、社交界に出入りし、またフランス化への努力さえした。けれどもルソーの内なる「ジュネーヴ的自我はいつかな眠らず、」ここ文明社会の現実 に接して、反撥と疎外、違和の感情がつのるばかりであった。そして事ある毎にジュネーヴ人——外国人であることを思い知らされ、さてはこれをおのれの背負う「原罪」として指摘されるに及んで、ルソーはますます祖国ジュネーヴへの愛着を深め、同時に人間本来のあり方、

人類社会の眞のあり方について深刻な省察を余儀なくされた。

ルソーの胸の底には抵抗しがたい何ものかが鬱積した。そしてそれは、幼時プルタルコスによって植えつけられたヒロイズムの酔素の醗酵とともに、やがて爆発点に達する。その火口をつけたのが、あのデイジョン・アカデミーの懸賞課題だ。——「学問芸術の復興は道徳の醇化に貢献したかどうか。」——瞬間、ルソーは靈感に打たれ、「別人」となり、「別世界」を見た。(『告白録』巻八参照)

一七四九年のこの開眼の瞬間から、薄志弱行の徒ジャン・ジャックは決然たる愛国者として、また驕慢な自然の使徒、文明の弾劾者として立現われる。そして無上の誇りをもって「ジュネーヴ市民¹⁾ジャン・ジャック・ルソー」と署名する。自分は絶対君主国の臣民、奴隸ではなく、自由国家の市民、民主的共和国の主権者人民の一員だ²⁾というのだ。

1) Jean-Jacques Rousseau, citoyen de Genève.

2) 一八七八年の記念講演でヴィクトル・ユゴーは「フランスで、ルソーは市民と称した最初の人たるの光栄をもった」と語った。

けれども、ありていにいえば、ルソーの喚び起すジュネーヴは、すでに実在のジュネーヴではなかった。かれは独自の空想力と愛国的熱情でもって祖国を美化し、理想化して、いうところの絶対善——「自然」の諸属性の実現された地上唯一の共和国を描き出す。ジュネーヴの憲法は「もっとも崇高な理性によって¹⁾」制定され、そこ

では道徳の掟が尊重され、人々は美しい湖水のほとりで自由かつ幸福に生きていくとかれはいうが、現実のジュネーヴは必ずしもそうではなかった。建国以来二百年、有機体のつねとして組織はすでに団定化し、やがて同市民ルソーをも断罪するであろう「貴族的ジュネーヴ」²⁾がそこにあった。

1) 『不平等論』献辞

- 2) 一七九四年十月十一日、ルソーの遺骸はエルクノンヴィルの墓所からバンテオン廟へ移葬されたが、その式典に参加したジュネーヴ代表団の幟には「貴族的ジュネーヴはかれを追放したが、再生ジュネーヴはかれの名誉を回復した」と書かれていた。

その上、ルソー自身も一種の流謫者であった。かれは流謫者のつねとしてしばしば郷愁の発作にかられ、遠くにあつて故郷を思っていたのだ。回想と遠近法の魔術。ジャン・ジャックの脳裡に描かれるジュネーヴは、地平線のかなたに浮かぶ蜃気楼、いわば「まぼろしの共和国」であつたかも知れない。ルソーは「ジュネーヴ以上にジュネーヴ的」^{*}だったのである。

* François Jost, *Jean-Jacques Rousseau Suisse*, Fribourg, 1961, I, p. 189.

それはともかく、ルソーは「真の愛国者」として祖国ジュネーヴに執着し、これを誇示してやまなかつた。わけてもその理論的著作においては、公然と祖国に奉仕し、これを擁護し、かつその栄光を讃えることを意図していた。モーリス・バレスの論難する作品について見れば、まづ『不平等論』の献辞にそれは明らかだ。

「自分の祖国に、それが受けうる尊敬をささげることが、有徳の市民にのみふさわしいことと確信して、私は三十年來、公然たる敬意を諸卿に表するに値するよう努力しています。……幸いにして諸卿の間に生れた私は、自然が人間の間に置いた平等と人間が打立てた不平等について省察する時、どうしてあの深い英知を想わずにいられましょう。その英知をもって、この国では、こうした平等と不平等が見事に組合されて、自然法にもっとも近く、また社会にとってもっとも有利な方法で、公的秩序と個人の福祉の維持に協力しているのであります。政府の構造について良識の命じうる最良の原則を探索しつつ、私はそうした原則が諸卿の政府においてすべて実施せられているのを見て心打たれるのであります。……」

親愛な同市民よ、いやむしろ兄弟よ、というのは血のつながりが法律と同様にわれわれを結びつけているからであるが、諸卿のことを思うと、同時に諸卿が享受しておられるあらゆる善美を想わずにいられないのは私にとって心うれしいことでもあります。……

願わくば、かくも賢明に、またかくも見事に組織された共和国が、その市民の幸福と諸国民の模範のために、永遠に存続しますように！」

『社会契約論』の冒頭にも同様の文言が見られる。――

「自由国家の市民として生れ、また主権者の一員たる私は……諸種の政治形態について考察するたび毎に、私の探究において、自国を愛する新たな理由を見出して満足に思う。」

そしてこの書は、周知のように、ルソー一流の切口上――「人間は生れながらにして自由であるが、しかも到るところ鉄鎖の中にある」という句から始まるのだが、ここに構想される政治形態は、疑いもなく「ジュネーヴ

共和国」をモデルとしている。そしてルソーはこれを全世界のあらゆる国民に範として提示して憚らないのだ。

教育論『エミール』についても同様だ。この書もルソー一流の宣言から始まる。「万物は造物主の手を出るや善であるが、人間の手に入って墮落する。」——つまり自然は善、社会は悪の大原理の設定なのだが、この「自然」もまたジュネーヴの側にある。なぜならルソーの説く理想的人間像「自然の人間」ないしは「自然人」は、現実社会にあつては「市民人間」であり、その定義は明らかに「ジュネーヴ共和国」の市民概念に拠っている。その他ルソーの作品は、その莫大な書簡をも含めて、すべて同じ意図に貫かれている。『ダランボールへの書簡』は、その執筆の動機からして言うまでもないが、『新エロイズ』は、作者も認める「ジュネーヴ小説」であり、『告白録』については、今日もお、これを語るルソーの同国人はしばしばこう繰返すといわれる。「何とかはジュネーヴ人であることか！」*

* Alexandre Chouguine, *les Origines de l'Esprit National Moderne et Jean-Jacques Rousseau*, Genève, 1938, p. 84 (*Annales*, XXVI)

かくてルソーにおける主要概念は、すべてカルヴァンの町の知的世襲財産に由来している。そしてその作品は全面的にジュネーヴ色に彩られているが、フランス人から見ればジュネーヴ臭にみちていたであろう。

*

ところが、この執拗な、あるいは偏狭な愛国者ルソーは、同時にもっとも高邁な世界主義者でもあったのだ。

モーリス・バレスも指摘するように、ルソーは「観察せず、想像し、」その上「専断的理性」をもっていた。これは想像の翼を翺って空中に楼閣を描き、また何事も極端に一般化してやまぬ独自の知的性癖をもっていた。ルソーに親しい「自然」の概念もこうした頭脳操作の産物にほかならない。ルソーは「自然」という絶対的普遍的概念を、何のためらいもなく第一原理として設定し、そしてそこから自然状態、自然的平等、自然的自由など一連のルソー的概念を抽出す。『不平等論』における所有権の分析、『社会契約論』における一般意志の設定、『エミール』における国籍不明の自然人——すべて同じ発想方式によるものだ。しかもルソーはこうして得られた理論の適用においてもまた一般化してやまず、何かといえば全世界に、全人類に訴えるのだ。例の宣言口調で、またつねに自然の名において。——

「私の主題は人間一般にかかわる故に、私はあらゆる国民に適当した言語を用いることに努めるであろう。あるいはむしろ時代と場所を忘れて、……私は人類を聴衆とするであろう。おお、人間よ、君がいかなる国の人であれ、また君の意見が何であれ、聞き給え。これが君の歴史なのだ。嘘っぱちの君の同胞の書物の中にはなく、決して嘘をつかぬ自然の中に、私がたしかに読みとったままの君の歴史なのだ*」

* 『不平等論』前文

ルソーには中間の項がない。個々特殊はたちまち一般化され、普遍化される。そして事実と論理、歴史と伝統は無視され、たとえば、かれの小さな祖国「ジュネーヴ」は世界諸国民のモデル国家となり、その愛国者ジャン・

ジャック自身は人類愛の具現者となる。——バレスの言葉によれば「ルソーは学問の方法を知らない」のである。

けれどもここでわれわれは、こうした世界主義、あるいは所謂インターナショナルイズムそのものが、これまたジュネーヴの、ひいてはスイスの国民性の一特質であることにも注意しなければならない*。

* 文学的コスモポリティスムについては、ジョセフ・テクストの著書に詳しく。(Joseph Texte, *Jean-Jacques Rousseau et les origines du cosmopolitisme littéraire*, 1895.)

さて、このようなルソーは「ジュネーヴ市民」の肩書をまるで神徳のように振廻し、加えて「外国人」たるの身分を利用して、眩惑的なパラドクス——「憎むべき逆説」を伝播する。「外国人としてフランスに生きている」ために、ルソーの立場は「あえて真理をいうのに非常に好都合」であり、また「孤独な外国人」であるかれは「ただ自分の原理と主義にのみ固執しつつ、大胆不敵に廉直と真実の道を歩んだ」のだった。(『告白録』巻九、十参照)

さらにルソーは、自分の思想行動については「ジュネーヴ共和国」の当局にのみ責任を負うと公言する。つまりフランスから責任を問われるいわれはないというのだ。

「共和主義者であるこの私の主義主張については、フランスには、私を尋問したり、私にいかなる責任をも追及する権利をもつ裁判官も、法廷も、議会もなく、また大臣も、国王そのものでさえないのだ*。」

* Lettre à Rey datée du 29 mai 1762.

流謫者ルソー、あるいは「根こぎにされた人」* ジャン・ジャックは、三十三年間フランス国で生活したのだ。フランス人から見れば、こうした振舞は我慢がならなかったであろう。

* Cf. Maurice Barrès, *les Déracinés*, 1897.

ヴォルテールならば「ジュネーヴから来たお大名」が、厚顔にも「生活の糧をあたえる国民」に説教をする、
といて一笑に附することも出来るであろう。だがフランスにも愛国者、保守主義者、伝統主義者がいるのだ。
『文学年報』の編集者エリ・フレロンはいう。

「何たることだ！ 外国人が、自分をふところの中に受入れてくれた国民を侮辱し、これを無智だとか、野蠻だとか呼ばわり、そしてその芸術と芸術家をけなすなんてことが許されようか！」¹⁾

1) Cf. Ximénès, *Troisième Lettre sur la Nouvelle Hélicse*.

2) Elie Fréron, *L'Année littéraire*, 1754.

モーリス・バレスの心事も、およそ推察されるであろう。特に一九一二年といえば、第一次世界大戦の前夜なのだ。物情騒然として、危機感にみち、祖国フランスは断崖のふちへ追いつめられていたのである。*

* この年——一九一二年、ジュネーヴ大学における記念講演で、ベルナル・ブーヴィエ (Bernard Bouvier) は語った。「ジュネーヴでは、感じやすい子供は祖国の観念を直接に、強力にうけていた。公民教育は日常のことであり、すべての人に開かれていた。市民は特権階級を形成し、そこでは愛国心が自然な、本能的な、基本的な力をもって、い。ルソーにおいては、それはあらゆる試練、あらゆる憤怒に耐えた。云々。——Cité par Choulingue, *op. cit.*」

モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』(永田)

さて、ルソーを肯定するか否かは、どうやら、かれの祖国「ジュネーヴ共和国」を是認するか否かにかかっているようだ。バレスはこれを否認し、ローランはこれを是認する。――

ロマン・ローランは全的に「ジュネーヴ」を肯定した。かれはジュネーヴの特殊性も一般性も、あるいはスイスの世界主義をも容認するが、これまたローランの精神傾向と思想的立場からすれば、容易に理解される。前述の『ルソー読本』の序文で、かれはマルキシズムの創始者たちがヘーゲル弁証法のメカニズムを論証するにあたって「ルソーの実例そのもの」を援用したことを指摘し、また「若き日本、新中国がルソーの教えを取入れた」ことにもふれている。そして最後にローランは個人的感懐をのべていう。

「結びとして、この偉大な音楽家詩人に、私の個人的感謝を述べることを許されたい。私は、かれの心が決してさまようことをやめなかった」という――美しいレマン湖畔の散歩道において、また私がこの文章を書いているヴィルヌーヴの住居において、しばしばかれの亡霊に会った。ここからは、窓を通して、クラランの入江や斜面が見えるが、その斜面の頂きには、樹々の間に、ジュリーのバラ色の家が夢みている。」

果して、ロマン・ローランも最後に「偉大な音楽家詩人」という。先にバレスは「大交響楽の中の……魔法

使」といった。ともに結びのパラグラフで、ルソーの音楽的資質に敬意を表しているのは注目に値しよう。かれら自身、同じく熱っぽい音楽的散文の使い手なのだ。

* 一九五九年夏、筆者もレマン湖畔にルソーの影をもとめて彷徨したが、ある日ローランの住居を訪ねて、ルソー、トルストイ、ロマン・ローランなどに想いを寄せ、低徊去り難い思いがした。

以上、われわれは故意に「ジュネーヴ」の側にのみ注目して、ルソーの今一つの祖国「フランス」には言及しなかった。けれどもルソーとフランスとの関係を見て、ルソーのフランス鼻負を知ったとしても、バレスの論調は決して変らなかつたであろう。いふなれば、バレスは二十世紀におけるフレロンなのである。

*

由来、作家による作家論は、その真実味と生氣において、われわれを特に惹きつける。モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』は、本文わづか十頁の小篇ながら、ローランのものとともに、ルソー論の逸品であり、同時にそれぞれの信仰告白としても興味ふかい。そしてあえてつけ加えるならば、ルソーとバレスとロマン・ローランは、三者ともに、その天性の資質において同類であつたと思われる。パスカルとヴィニー、あるいはデカルトとヴァレリーが精神の同族であるといわれるように。(完)

附記

筆者の使用したマンレスのテキストは一九二二年 Paris, Editions de "l'Indépendance" から刊行された小型限定版(八七五部)で、その白犢皮紙製八五〇部のうちの "Exemplaire numéroté : 353" である。なお、本文の見出しには左の通り記をわけてある。——

OBSERVATION PRÉSENTÉE A LA CHAMBRE DES DÉPUTÉS, LE 11 JUIN 1912

à propos du bi-centenaire de Jean-Jacques Rousseau.